資 源 評 価 調 査 事 業

藤田弘一・久野正博・中西尚文・竹内泰介・山田浩且

目　的

我が国周辺における重要漁業資源の資源量評価，動向の予測，最適管理手法の検討のために必要な基礎資料を収集するため，水産庁「資源評価調査事業実施要領」に基づく独立行政法人水産総合研究センターの「資源評価再委託調査実施要領」に沿って調査を実施する。なお，各漁業資源の資源量評価，動向予測等については，水産総合研究センター中央水産研究所によってとりまとめられるため，ここでは本県が委託を受けている６魚種（マイワシ・カタクチイワシ・ウルメイワシ・サバ類・マアジ・スルメイカ）の本県沿岸域における本年度の漁況特性についてとりまとめる。

方　法

１．漁場別漁獲状況調査

県下の中型まき網13ヶ統，沖合底曳網１ヶ統から漁獲成績報告書（月報）を徴収し，漁場別漁獲動向を把握した。

２．水揚げ調査

県下主要水揚げ港（白子・河芸・安乗・波切・片田・和具・贄浦・奈屋浦・錦・紀伊長島・九木の11港）において，日別，漁業種類別，魚種別漁獲量を調べた。

３．生物測定調査

県下主要港に水揚げされたマイワシ，カタクチイワシ，ウルメイワシ，サバ類，マアジについて魚体測定を行い，漁獲物の生物特性を把握した。

４．卵稚仔分布調査

毎月１回，伊勢湾および熊野灘の所定の定点（計12定点）において改良型ノルパックネットの鉛直曳きを行い，調査対象種の卵稚仔出現動向を把握した。

結　果

調査結果に基づく調査対象魚種の本年度の漁況特性は以下のとおりである。なお，ブリの漁況については，イナダ，ワラサ，ブリは本事業報告の地域レベルでの漁況海況情報の提供－Ⅲ（定置網漁獲統計調査）の項で，モジャコは平成13年度漁海況予報関係事業結果報告書でそれぞれ詳細に報告されているのでここでは省略する。

１．マイワシ

熊野灘主要港（奈屋浦・贄浦・錦・紀伊長島）における2001年度（平成13年度）の中型まき網によるマイワシの漁獲量は3,951トンであった（図１）。今期は夏季当歳魚の特異的な漁獲並びに冬・春季大羽群の漁獲の極端な不漁が特徴的であった。前年度の12月以降，越冬産卵群と思われる大羽群（被鱗体長19～22cm），および2000年級群である小羽群（被鱗体長14～16cm）の漁獲が好調であったが，４月まで引き続いて漁獲が見られた。その後，漁獲は途絶えたが７月に入り体長10cm 前後の当歳魚が当歳魚が熊野灘沿岸部で大量に漁獲され始め，７月末から９月上旬にかけては熊野灘の沖合いにも漁場が拡大して当歳魚のまとまった漁獲が続いた。県 TAC（暦年）の上限もあり，８月中旬以降操業時間（午前２時まで）並びに網入れ回数の制限（１日２回）を行ったにも関わらず，近年多かったサバ類，マアジ等他の漁獲対象魚の魚群分布が少なかったこともあって，2001年６月～11月までの漁獲量は2,690トン（11月分は暫定値）であった。これは昨年同期15（トン）を大幅に上回り，過去９年間で1992年4,732トンに次ぐ２番目の漁獲量となった。一方，伊勢湾では，この魚群が湾内に入って漁獲され，９月には1996年以降久しぶりにまとまった水揚げとなった。７～12月の期間合計で777トンの漁獲量となった(図２)。

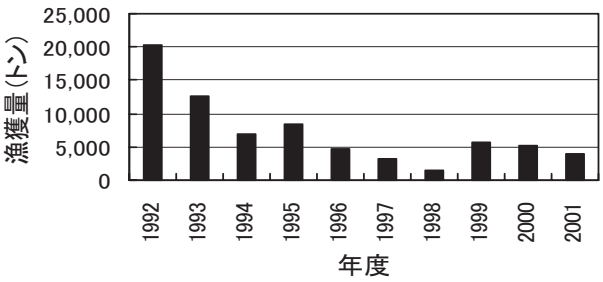

図１　熊野灘主要５港マイワシ漁獲量(中型まき網)

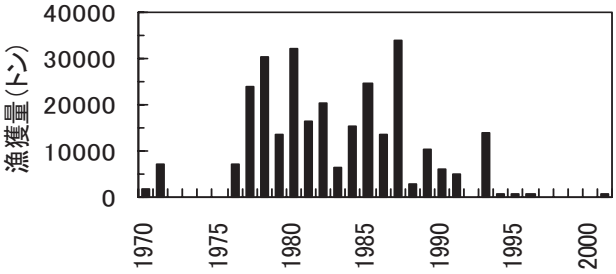

図２　伊勢湾主要２港マイワシ漁獲量

２．カタクチイワシ

熊野灘主要港（奈屋浦・贄浦・錦・紀伊長島）における2001年度（平成13年度）の中型まき網によるカタクチイワシの漁獲量は1,305トンで，前年度の漁獲量（2,523トン）から半減した（図３）。近年熊野灘では冬季の産卵親魚群（成魚大型群）が高い水準で来遊し，前年度末の２月から漁獲が見られ，２～３月の合計漁獲量は2,484トンの豊漁となったが，これらの魚群は４，５月も続いて漁獲され，主体は被鱗体長12～14cm の成魚群であった。一方、2001年７月～12月の伊勢湾主要２港（白子・白塚）のバッチ網漁業による漁獲量は9,413トンで，不漁であった前年（4,442トン）の約２倍となった（図４）。

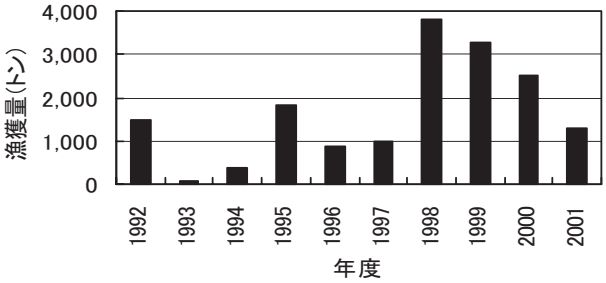

図３　熊野灘主要５港カタクチイワシ漁獲量(中型まき網)

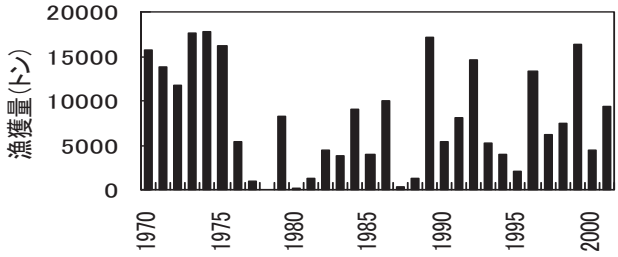

図４　伊勢湾主要２港カタクチイワシ漁獲量

７月３日から解禁となり，７，８月の漁獲量は8,569トンに達し，主要２港において漁獲統計が整備された1970年以降では最高を記録した。しかし，９月に入り漁況は急に低調となり，10月以降はマアジやサッパなどに時折混獲される程度となった。漁獲主体は７月で体長８～10cm，８月で10～11cm，９月で10～11cm の未成魚～成魚小型群であった。10月は前半は10～11cm の成魚小型群，後半は６～７cm の未成魚が，11月は８～９cm の未成魚～成魚小型群が漁獲された。

３．ウルメイワシ

熊野灘主要港（奈屋浦・錦・紀伊長島）における2001年度（平成13年度）の中型まき網によるウルメイワシの漁獲量は1,028トンで，不漁であった前年度の572トンから大幅に増加し，豊漁となった1999年度（998トン）および1998年度（915トン）に並ぶ水準での漁獲量となった（図５）。また，これは記録を取り始めた1982年以降で最高の値である。月別で最も漁獲の多かったのは，11月の589トンであった。この原因として10月頃から熊野灘南部で黒潮からの暖水波及が継続してみられたことが考えられる。

ただし，漁獲が継続したわけではなく水揚げされた日数も少なかったため，市場調査による魚体測定データは得られなかった。

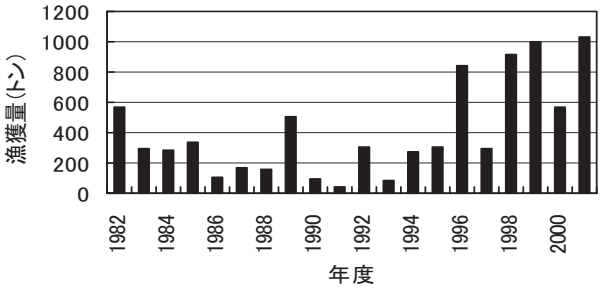

図５　熊野灘湾主要３港ウルメイワシ漁獲量(中型まき網)

４．サバ類

熊野灘主要港（奈屋浦，贄浦，錦，紀伊長島）における2001年度（平成13年度）の中型まき網によるサバ類の漁獲量は6,515トンで前年度の11,231トンから大幅に減少した（図６）。尾叉長組成の推移等から判断すると，漁獲の主体はゴマサバ１歳魚（2000年級群）で，来遊量は1999年級群で好漁のあった前年とほぼ同水準で６～７月は経過したが，その後８月になって漁獲は急減した。例年なら夏季～秋季に加入の見られる当歳群（2001年級群）の来遊水準が著しく低く，全体としては近年の平均的漁獲量（約10,000トン）を下回る結果となった。

奈屋浦漁港でのサバ類全体に占めるゴマサバの混獲比は2001年度漁期全体で93.7%であった。マサバについては４～５月に数十トン/月の混獲が見られた程度であり，散発的な漁獲に終始した。

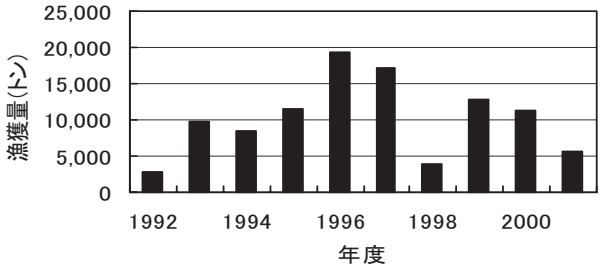

図６　熊野灘主要５港サバ類漁獲量(中型まき網)

５．マアジ

2001年度における熊野灘主要港（奈屋浦，贄浦，錦，紀伊長島）の中型まき網によるマアジの漁獲量は1,746トンで，1992年度以降で最高の値となった前年度の5,277トンから大きく減少した（図７)。漁獲の主体は１歳魚および当歳魚で，１歳魚の来遊量は前年を大きく下回り，期間中低調な漁獲に終始した。７月以降はそれまでの定置網に加えてまき網漁業へも当歳群の加入が始まった。当歳魚の来遊量は定置網では前年並かやや上回る程度，中型まき網では前年を大きく下まわった。このため全体として，秋季の漁獲は低調となった。

前年秋季における2000年級群の加入は低調であり，その結果今年１歳魚の漁獲が低調であった。今秋季の当歳魚の加入状況は前年よりもさらに少ないと見られる。

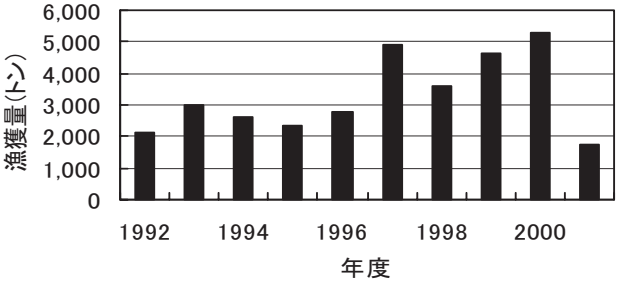

図７　熊野灘主要５港マアジ漁獲量(中型まき網)

６．スルメイカ

和具港（県下最大のスルメイカ水揚げ港）における2001年５～９月の一本釣りによるスルメイカの漁獲量は138トンで，集計を開始した1984年以降で最低となった前年の63トンから大幅に増加した（図８)。月別での最高漁獲量は５月の42.7トンであった。漁期中の漁獲量の合計は1997,1998年に並ぶ漁獲量となったが，この期間中の出漁隻数は931隻で，1997年の1,150隻および1998年の1,162隻よりは減少している。１日１隻あたりの漁獲量（CPUE）は漁期中を通じて100kg 以上と好漁で経過した。漁期中を通じての平均 CPUE は149kg/隻/日であり，1995年の200kg/隻/日以降では最も高い数値であった。

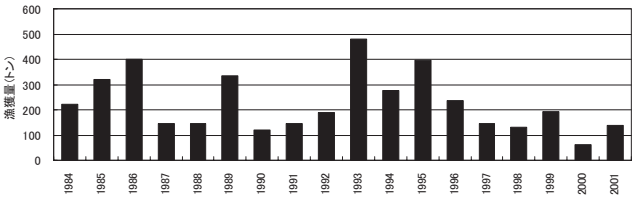

図８　和具港におけるスルメイカ漁獲量
（一本釣り，夏イカ漁（５～９月計))

関連報文

・長期漁海況予報（中央ブロック）No.115-117，中央水産研究所.

・平成13年度漁海況予報関係事業結果報告書（漁海況データ集)，三重県科学技術振興センター水産研究部 (2002).